

オスプレイとの闘い——沖縄の夏2012

山本英夫

去る七月二日から岩国経由で沖縄に入った。もちろんお目当では八月五日のオスプレイ配備阻止の県民大会だった。しかし、ご承知のとおり、この八月五日の県民大会は台風接近により急遽延期された。当日の私は、高江で身動きがとれず、東京の集会をネット中継で視聴した。一千人参加の報に、私の周辺の沖縄の人々は好意的に受け止めてくださった。

米軍は、七月一日にオスプレイを乗せた貨物船を出港させ、七月二三日早朝、岩国にオスプレイを強行搬入。また、八月八日までに、F22戦闘機一二機（一個中隊）を嘉手納基地に半年間のローテーションで配備した。この戦闘機は最新鋭ステルス機であり、米空軍ご自慢の機体だ。しかしこれも欠陥機のような。パイロットが低酸素症に陥っている。このため、同機のパイロット有志は、乗務を拒否している。しかし米軍は、飛行中に気を失い、墜落する可能性を無視し、機体改修を行わないまま、沖縄の空を飛ばしているのだ。

翌八月九日、私は辺野古のテントで、早朝から異様なジェット音を何度も聞かされた。F15と比べて、明らかに高音の轟音を撒き散らして飛び去っていく。この日だけで、私は六回ほどF22を確認した。望遠レンズを通して見れば、一度はパイロットが見える距離を飛んだ。沖縄島の住民はこうした騒音と危険の中に暮らすことを余儀なくされている。米軍は事故が起きても「人為ミス」と称して、事故原因を曖昧にし、責任をとらない。日本政府は責任追求どころかこれを追認する。

日本政府、防衛省は、オスプレイを巡る茶番劇を連日繰り返している。仲井真知事も、佐喜真宜野湾市長も、色よい返事をしていない。できないのだ。上に見た事情をお見通しだからだ。

森本防衛大臣は、「安全策を講じる」と言っている。住宅の上で演習しない、海上でやってくれと。しかし、普天間基地の隣に、人家、学校、

保育園、公民館等がある。ヘリは滑走路に沿って飛ぶよりも、住宅方向に飛ぶ。オスプレイに変わっても、この現実が変わるまい。変えるスペースがない。防衛省に変える力があるのか、変える気があるのか。何れもない。現に「綱紀粛正」と言って変ったか。変らない。

しかし、権力は茶番劇がお好きだ。伊集東村長は、高江はオスプレイパッドと認識していないと言いつ張り、ヘリパッド建設工事に反対せずの立場を変えていない（ヘリパッドじゃない住民の会等との交渉で。八月七日）。村長はオスプレイの配備に反対と言いつながら、工事容認の姿勢を変えない。米軍はオスプレイも使いますと言っているのだ。何故か。私達はその理由を推量するしかないが、この不合理の陰には、利権が絡まっており、密約があるに違いない。もしも「ない」ならば、こうした没論理は成立しない。ありえない。

前原民主党政調会長は、台風の八月五日に訪沖。会谈相手は島袋吉和前名護市長ら。何を話したかは秘密らしいが、それは北部振興策と基地建設の裏話に違いない。辺野古区出身の宮城安秀市議らとも会っている。

また、九月九日の県民大会実行委員会は高江ヘリパッド・オスプレイパッド工事反対を明言していない。高江の住民の会は、これに抗して、奮闘中だ。

私は九月八日から沖縄に再訪する。県民大会、辺野古、高江、普天間等におじゃまする。詳細は九月二一日のスライド&トークで報告する。

（やまもと・ひでお／フォトグラファー）